

## 華麗なるハプスブルク帝国——その永遠の光芒（四）

「女帝」対「大王」、因縁の対決

富山典彦

一七四五年九月二十五日、マリアⅡテレジアの最愛の夫ロートリンゲン公フランツⅡシユテファンは、フランクフルト・アム・マインで無事に神聖ローマ皇帝フランツ一世となった。これによって、オーストリア継承戦争は終結したのかと思いきや、戦いの火はまだまだ続いていた。それは、オーストリア継承戦争のそもそもの出発点が、広大なハプスブルク家の家領の「相続」をめぐる争いだったからである。

ザクセン選帝侯のプリンスと結婚したマリアⅡヨゼファとバイエルン選帝侯のプリンスと結婚したマリアⅡアマールIE、前者は一六九九年生まれで後者は一七〇一年生まれ

だったから、一七一七年生まれのマリアⅡテレジアよりずっと年上の従姉たちがその相手ということになる。カル六世の国事詔書では、ハプスブルク家の家領を今後は一体のものとして、カル六世の長子が男であれば女であれば単独で相続することが決められていたから、当然のことながらマリアⅡテレジアがその唯一の相続者であり、この二人には相続権はなかった。とはいえ、相続をめぐる争いはいつの時代にも絶えず行われており、まして広大なハプスブルク家の家領のことだから、かりに三分割したとしても相当のものである。

しかもこの戦争の発端は、シレジアをめぐる、本来権

利などないはずのプロイセン王フリードリヒ二世が介入してきたことにあったから、これが決着しないことには終わりはない。一七四五年の夏、フランクフルトでの戴冠式の少し前に、プロイセンとの戦争が再開する。開戦後間もない九月三十日、これまでハプスブルク家の戦いの先頭に立って活躍してきたフランクツ一世の弟ロートリンゲン公カールが、今度は北東ボヘミアで手痛い敗北を喫する。しかしその一方、十二月十五日にはザクセン軍がオーストリア軍に敗北し、二十五日にドレスデンで和平条約が結ばれる。これでとりあえず、第二次シレジア戦争が終結することになる。プロイセンは獲得したシレジアを保持するかわりに、フランクツ一世をドイツ王・神聖ローマ皇帝として認める、これがこの和平の条件である。これ以後、ハプスブルク家、正式にはハプスブルク＝ロートリンゲン家は、一八〇六年にフランクツ二世が退位するまで、名称だけとはいえないこの地位を独占し続ける。

フランクフルトでの戴冠式の際、皇帝として戴冠する夫のとなりで皇帝妃として戴冠することを頑なに拒んだマリヤ＝テレジアではあったが、もともと政治に無関心な夫フランクツ一世とは違って、ようやく訪れた束の間の平和を、

伯父のヨーゼフ一世と父のカール六世が着手しようとしていたハプスブルク帝国の内政改革のために利用する。この時代から一世紀あとに建設されるリンクシュトラーセの外側に、美術史博物館と自然史博物館とが向かい合って建っているが、その中央にそびえ立つマリヤ＝テレジア像の下に、数人の騎馬に乗った男たちがいる。これこそ、「女帝」マリヤ＝テレジアを支えた官僚たちである。

ハプスブルク家で最初に王に選ばれたルドルフ一世は、マルヒフェルトで自ら先頭に立ってボヘミア王オットカル二世と戦っただろうが、もうそんな時代ではない。まして、女性のマリヤ＝テレジアが先頭に立って軍を指揮することなどあり得ない。内政改革と外交が課せられた課題ということになるが、それも、この時代には官僚組織がかなり出来上がっていた。内政改革に向けてマリヤ＝テレジアは手始めに、ハウクヴィッツ伯フリードリヒ＝ヴィルヘルムに全権を委任する。

ハプスブルク帝国とはそもそもハプスブルク家の家領の集合体で、ハプスブルク家に生まれたらオーストリア大公・大公女の称号が与えられる。この帝国内にあるハンガリー王国とボヘミア王国にはそれぞれ、聖イシュトヴァー

ンの王冠と聖ヴァツラフの王冠があり、前者はプレスブルクで後者はプラハで戴冠式を行うことになっていた。もちろん、場合によってはこの手続が省かれてしまうこともあるが、この当時、基本的にはウィーン、プレスブルク（現在はスロバキア共和国のブラティスラヴァ）、そしてプラハがハプスブルク帝国の三大宮廷ということになる。

このときの改革では、オーストリアとボヘミアの宮廷が統合されてしまう。つまり、プラハの宮廷はウィーンの宮廷に吸収合併されるということである。ハンガリーの宮廷は一応独立はしているものの、その宮廷の所在地はウィーンということになる。こうすることで、ウィーンにすべての宮廷が置かれ、ブルボン王朝のパリのような中心都市になるはずであった。一応独立を保っているハンガリーは、プレスブルクに総督府を置くことで、なんとか形を整える、ということだろう。この宮廷改革は一七六二年までに完了し、ハンガリー王国とボヘミア王国を統括する中央官庁は、三月革命が起こる一八四八年まで続いたという。

次いで問題は財政改革である。ここでもまた、ハンガリーには特別の措置が執られてこの改革から除外されるが、改革の一番の目玉はもちろん、税金の問題である。教

会と貴族に対する租税免除は取りやめにして、一八・七五パーセントの所得税を導入した。なお、実際に土地を利用していた農民には土地税なるものを課した。

税のシステムとともに大事なことは、通貨制度であり、このとき二十グルデンを十ターラーに決めるとともに、一七五一年にはマリア・テレジア・ターラーという貨幣を鑄造した。イギリスでは今でもエリザベス女王の肖像がポンド紙幣に描かれているが、ハプスブルク帝国の通貨に「女帝」が登場したわけである。なお、ターラーはグリムのメルヘンのなかの「星の金貨」(Sternthalr)で、貧しい女の子のうえに空からきらきら輝きながら降ってくるが、金貨ではなく銀貨であり、銀鉱山が開発されたことと関係がある。江戸時代の日本でも、江戸は金本位制だったが上方は銀本位制だったという話を聞いたことがある。通貨改革もまた、政治改革の重要な一翼を担っている。

その少し前、オーストリア継承戦争が終結したすぐあとの一七四九年、マリア・テレジアは枢密会議に新たな外交政策の試案を出すようにと依頼していた。外交とはすなわち、「戦闘のない戦争」であり、どう駆け引きするかで結果が大きく違ってくる。カウニッツ伯爵ヴェンツェル・アン

トンは、プロイセンに奪われたシレジアを取り戻すことが最優先課題であり、そのためにはフランスと同盟することの必要性を強調した。宿敵フランスとの同盟などという、そんなとんでもないことが外交戦略ということなのだが、残念ながらオーストリアではまだその機が熟していなかった。翌一七五〇年、内がダメなら外からとでもいうのか、カウニッツ伯は特使としてパリに赴き、そこで同様のことを提案するが、やはりまだその域には達していなかった。しかし、いずれはこれが実現することになるのだから、歴史は面白い。

この時代には、イタリアにもハプスブルク家の家領があったが、それを安定させるために一七五二年六月十四日、オーストリアはスペイン並びにサルディニアと同盟する。政治的な同盟をより強固なものにするのが、洋の東西を問わない政略結婚であり、一七五三年五月十一日、モデナ・エステ公フランツとハプスブルク家との結婚が取り決められる。マリア・テレジアの十四番目の子どもで四男のフェルディナント大公と、モデナ・エステ公女マリア・ベアトリクスとの結婚である。

こうした働きが評価されて、カウニッツ伯は一七五三年

に首相に指名され、その権限で最初のオーストリア外務省を設立する。そして次はいよいよ念願の宿敵フランスとの同盟ということになる。外交は戦闘のない戦争だから、プロイセンも黙ってはいない。プロイセン王フリードリヒ二世は大ブリテンとの防衛協定を取り交わす。これを受けてついに一七五六年五月一日にフランスは、オーストリアとの防衛協定に合意する。宿敵フランスを味方につけた「女帝」と、イギリスを後ろ盾にした「大王」との最終決戦の日に近い。

これまで軍隊の強さを誇ってきたプロイセンではあるが、軍隊と軍隊との決戦の前に、ビラを配ってオーストリアとハンガリーの人民に揺さぶりをかける。さらに、かつてウィーンを二度にわたって包囲したトルコにまで働きかけるが、この時点でそこまでやるとは、フリードリヒ大王もかなり切羽詰まっていたことだ。プロイセンもおそらく、これまでの度重なる戦争で、財政が破綻状態にあったことだろう。

一七五六年八月二十九日、フリードリヒ二世はザクセンに進軍する。これが第三次シレジア戦争、高校の世界史で習う七年戦争の始まりである。外交が戦闘のない戦争だと

すれば、戦争は戦闘による外交であり、フリードリヒ二世はオーストリアに妥協案を突きつける。おそらくそれによつて戦争を早期に決着するのが狙いだつたのだろうが、マリア・テレジアはそれを拒否し、戦争は継続する。宿敵フランスとの防衛協定を結んだオーストリアは、さらにロシアとの防衛協定をも締結する。プロイセンは、大陸において周囲はすべて敵という状況に陥ってしまう。

こんな四面楚歌、いや三面楚歌の状況だからこそ、フリードリヒ大王は戦闘に勝利してより有利な和平への道を進むしかない。一七五六年九月十三日、大王はボヘミアに侵攻し、プラハを包囲する。プラハ落城ということになると、シレジアばかりかボヘミアまで奪われてしまうかもしれない。「女帝」は、夫の弟ロートリンゲン公カールに、プラハを死守せよと叱咤激励する。カール公もここは雪辱戦とばかりに、オーストリア軍の元帥であるレオポルト・フォン・ダウン伯のプラハ到着を必死の思いで待つ。

神聖ローマ帝国の長は「女帝」の夫である皇帝フランツ一世だから、帝国議会に働きかけて、翌年の一月十日、プロイセンに宣戦布告を決定させる。しかし、百年以上も前からハプスブルク家の皇帝の言うことを聞かない帝国諸侯

たちのこと、とくにプロテスタントの諸侯は、同じプロテスタントのプロイセンを支持する側に回る。帝国議会の名義での宣戦布告は、たんなる掛け声とたいして変わりない。

しかし、同盟国である宿敵フランスはシレジアをプロイセンから奪還し、プロイセンを打倒するまでオーストリアを支えていくという、ありがたい決意を表明する。一七五七年五月一日のことであつた。もともと、フランスにはフランス一流の打算があることは見え透いていて、オーストリア領ネーデルラントを、フランスとブルボン家のスペインに割譲することが条件であり、かつて筆者が国際関係論の講義に出席したとき、百パーセントの友好関係など存在しないということを聞いたが、まさにその通りである。

一七五七年六月十八日、ダウン元帥はケルンの戦いでフリードリヒ大王に勝利する。これにより、プロイセン軍はプラハから撤退する。ケルンの大勝利の知らせを受けた女帝は歓喜し、マリア・テレジア勲章を作る。当然のことながらダウン元帥がその最初の受章者となる。なお、ハプスブルク帝国崩壊の一九一八年まで、この勲章がオーストリアの最高の勲章であつたということである。

常勝を誇っていたプロイセンは、フランス、ロシア、それにスウェーデンとの戦いに敗れる。今度こそ本当に四面楚歌だ。さらに、十月十六日から十七日にかけて、オーストリア軍がプロイセンの首都ベルリンを占領するという、あつてはならない事態となる。かつて、オーストリア継承戦争のとき、皇帝カール七世となったバイエルン王が、その本拠地ミュンヘンを占領されたことが思い出される。その後間もなく、失意のうちにカール七世は逝去したのだ。プロイセン王フリードリヒ二世にも、そんな運命が待ち受けているのだろうか。戦争の日々に明け暮れる「女帝」だったが、もともとは平和を愛しており、ベルリンを占領したオーストリア軍の兵士たちには、ベルリン市民に危害を加えるなどの命令を下していたということである。

さらに、シレジアでオーストリア軍は戦果を挙げ、フリードリヒ二世はテューリンゲンに撤退する。しかし、このまま負け戦を続ける大王ではなく、ロスバッハでは弱体の帝国軍を打ち負かす。いつもながら当てにならない帝国諸侯である。この勝利の余勢を駆って、十二月五日、ロートリンゲン公カール率いるオーストリア軍は、ロイテンでプロイセン軍による壊滅的打撃を受ける。フリードリヒ大

王の生死を賭けた戦いであつた。

翌一七五八年春、フリードリヒ大王はボヘミアよりもウィーンに近いモラヴィアを占領し、ウィーンへの道を確保しようとする。ベルリンの仇はウィーンで返す、ということである。しかし、そううまくはいかず、ラウドン男爵がこれを阻止し、プロイセン軍をシレジアまで追い返す。

ロシア戦線はというと、プロイセン軍はツォルンドルフでなんとかぎりぎり勝利はしたものの、ザクセンに撤退することを余儀なくされる。しかし、ダウン元帥がその行く手を阻む。十月、両軍がバウツェンで対峙する。まさに天下分け目の関ヶ原というところだ。フリードリヒ大王は、敵将ダウン元帥の決断力の弱さを計算に入れ、将軍たちの助言を無視し、いきなり決戦を挑む。

十月十四日、ホーホキルヒでプロイセン軍は壊滅的な敗北を喫し、敗走する。なにかと負け戦のイメージが濃いオーストリアだが、このときは歴史的勝利だった。マラトンの戦いの勝利を知らせた古代ギリシャ軍の兵士のように、翌十五日の夜にはダウン元帥の派遣した使者がシェーンブルン宮殿の門に到着する。「マラソン」とは違って、俊足の騎馬に跨がった使者だっただろう。このときちよ

うど、女帝は「名前の日」を祝っていたから、この大勝利の知らせの感激もまたひとしおというところだろう。ちなみにこの「名前の日」というのは、付けられた名前の聖人の日のことで、誕生日や洗礼日と同じように大事な「誕生日」である。

翌一七五九年はフリードリヒ大王にとって最悪の年となる。最悪ということはつまり、それさえ乗り切れればあとは良くなっていくことである。実際、一七〇一年にケーニヒスベルクで戴冠式が行われ、「プロイセン王」が誕生して以来、半世紀あまりでプロイセン王国は大ブリテン、フランス、ロシア、そしてオーストリアに次ぐ大国になるのだから。では、その最悪の年がどんなものであったか、ざっとたどってみることにしよう。

一七五九年七月二十三日に、プロイセンはカイでロシア軍に壊滅的敗北を喫する。そして、現在はドイツとポーランドとの国境になっているオーデル川のドイツ側にある都市、フランクフルト・アン・デア・オーデルで、ロシア軍とオーストリア軍とが合流する。そして、八月十二日に、クーナースドルフでプロイセン軍はふたたび壊滅的な敗北を喫する。もはやプロイセン軍は解体してしまったのと変

わりはなかった。その夜、フリードリヒ大王は「敗戦」を宣言する。

しかしここで、合流したロシア軍とオーストリア軍との間で、主導権争いが起こってしまう。第二次世界大戦のとき、東からソ連軍、西から連合軍がベルリンを狙っていたとき、地下にある司令部ヴォルフシャンツェにいたヒトラーが、ソ連軍と連合軍とが主導権争いをしてくれるのではないかと期待する場面が、ヒトラーの最期を描いた『ヒトラー最期の十二日間』という映画にある。しかし、この期待は実現することなく、ヒトラーは自殺し、第三帝国は無条件降伏、ソ連を含めた四カ国によって分割占領されてしまうが。

このときのプロイセン王国では、ロシア軍がベルリンを、オーストリア軍がポツダムを占領することになるのだが、一七六〇年と六一年の二年間、なんとか持ちこたえたというのだから不思議である。唯一の同盟国イングランドとの防衛協定もこのときに終了し、万事休すというところだ、「ブランデンブルク家の奇跡」が起こる。それは、一七六二年の年明け早々の一月五日に、ロシアの女帝エカテリーナが死去したことからは始まる。こちらはハプスブルク



家の「女帝」とは違って、名実ともにロシアの「女性の皇帝」であつたが、エカテリーナのあとロシアの皇帝となつたジョージ三世は、なぜプロイセンとの戦争を中止する。それどころか、五月五日にはプロイセンと同盟条約さえ締結する。スウェーデンも五月二十二日にプロイセンと休戦条約を締結し、四面楚歌という結果が一瞬にして消失する。まさに奇跡としか言ひようがない。

こうして、ザクセン選帝侯の仲介により、一七六二年十二月三十日にザクセンのフリードリッヒ・オースベルクで和平条約が結ばれる。これによって、シレジアをめぐる戦争は最終的に終わる。「女帝」はシレジアを取り戻すことができなかったが、そのかわり、長男のヨーゼフ大公はハプスブルク＝ロートリンゲン家の跡継ぎとして認められ、一七六四年三月二十七日に、フランクフルト・アム・マインでローマ＝ドイツ王に選出され、ヨーゼフ二世となる。これで、現皇帝フランツ一世がいつ亡くなつても、次の皇帝は息子のヨーゼフ二世以外にない。

父親の皇帝の存命中に長男を王に選ばせておき、皇帝の死後ただちにその王が皇帝として戴冠するという、選挙王制を利用して事実上の皇帝世襲化を行つてきたハプスブル

ク家は、ハプスブルク＝ロートリンゲン家となつてふたたびこの手法を取り戻したのである。このときマリア＝テレジアは想像もしていなかっただろうが、一七六五年八月十八日、三男レオポルト大公の結婚式のために家族で赴いたインスブルックで、皇帝フランツ一世が急逝する。継承戦争が起こることなく長男が皇帝ヨーゼフ二世になれたのは、この和議のおかげであつた。歴史的事実というものは、起こるべくして起こる必然の部分と、誰も予想していなかつた偶然の部分との、複雑怪奇なモザイク模様である、などと言つてしまつたら陳腐になりすぎるだろうか。

(つづく)